

徳川みらい学会第5回講演会



「大江戸商い白書」

東京工業大学教授 山室恭子氏



徳川みらい学会第5回講演会を12月14日(木)、しずぎんホール「ユーフォニア」で開催。東京工業大学教授の山室恭子氏が講演しました。講演要旨は次の通り。

(文責・企画広報室)

日本橋に人口が密集

江戸幕府は、江戸の街を統治するために詳細な調査をしています。嘉永6年(1853)に江戸の街に住んでいた人は57万4927人で、男性29万5453人、女性27万9474人。これは町人の人数で、このほかに30万とも50万とも言われる武家がいいます。では、どの地区に何人が住んでいたのか。「市中髪結沽券金高取調査」には、江戸48地区(各2km)で髪結が商売を始める時に支払った権利金が書かれています。髪結の金額は1回20文と決まっているので、権利金の金額が高い地区は、沢山の髪結がいて利益を上げている、人口の多い地区です。そこ

から地区ごとの人口を推定すると、日本橋南地区と日本橋北地区に密集して町人が住んでいたことがわかります。人口密度を計算すると、日本橋地区では33㎡に4人が住んでいました。

商売は15年で他人へ譲渡

3939人の江戸の商人のデータを見ると、商売を始めてから終えるまでの期間は平均15.7年という短さです。2年で店を閉めた人は全体の11%。3年〜5年15%。6年〜10年18%。11年〜15年21%。16年〜20年22%。親から子へ商売を継ぐ老舗のイメージはありません。

商売の権利は、親から子に相続する場合の見返りは必要ないですが、他人に譲渡する場合は金銭をもらいます。親から子への相続は全体の9%。他人に譲渡49%。新規16%。休業23%。商売の半数は金銭で譲渡されていました。

そして、他人に譲渡した場合の店は14年存続していますが、子に相続

した場合の店は6年しか存続していません。新規の店は10年未満で閉店しています。江戸の商人は「子に商売を継がせたら6年しか持たない」と見切りをつけていました。

米屋と炭屋が多く経営は厳しい

商売の業種は、炭などの燃料関係が最も多く、次いで米などの食料品関係です。店の規模は、小店が80%で、日本橋の通りに店を構える大店が10%。コンビニのように身近にある小店がほとんどで、ここでは米、炭などの生活必需品を売っていました。八百屋や魚屋は行商です。かんざし、呉服、薬などの贅沢品を売る大店は日本橋に集中していました。

1軒の店が相手にするお客様の数は、炭屋が154人(50世帯)、米屋が195人(67世帯)。採算ぎりぎりの、もうからない仕事でした。

買い手の立場で考えると、米と炭は重たいので、店が近くにあると良

い。贅沢品は何軒か見比べて気に入ったものを買いたい。そのニーズに応えていたのが日本橋の繁華街でした。古道具屋、古着屋、質屋などのリサイクル系の店と、居酒屋、汁粉屋などの飲食店も多いです。古道具屋1軒あたりの客数は126人。飲食店は117人。リサイクルショップとファーストフードが多いのは、江戸の街は来る人、去る人(他所者)が多く、古道具が頻繁に売り買いされ、所帯を持つまでは天婦羅屋、蕎麦屋に通う人が多かったからです。

武家の世界と商人の世界が併存

血縁関係が強く、ゆつたりと時が流れ、家格が固定していた身分制の社会という江戸時代のイメージは、武家と農民の話です。商人の世界は、血縁に関係なく才覚のある人に店を渡し、目先の利益を重視し、長期継続よりも短期交代を美徳とし、運と才覚で運命を切り開いていく世界でした。武家は伝統を重んじる安定した世界、商人は目先の利得を追う活気あふれる世界と、別々の世界に生きていて、お互いに相手に無いものを補っていました。江戸時代は、2種類の社会が並存していたことで、長く続いたと考えています。

個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)